目次

聖セシーリエあるいは音楽の力　ある伝説　ハインリヒ・フォン・クライスト　　1

聖セシーリエあるいは音楽の力　ある伝説　ハインリヒ・フォン・クライスト

聖像破壊運動の嵐が吹き荒れていた十六世紀の終わり、ヴィッテンベルクの若き学徒であった三人の兄弟が、アントワープで副牧師をしていた四人目の弟と、アーヘンの街で落ちあった。彼らはそこで、年老いた、何の面識もない伯父から転がり込んだという遺産の請求を目論んでいたが、頼りにできたはずの場所には人っ子ひとりおらず、やむなく一軒の宿屋になだれ込んだ。オランダで起きている奇妙な騒動について副牧師から話を聞くことで数日間を過ごした後、たまたま、当時、この市の門の前に建っていた聖セシーリエ修道院で、尼僧たちが主催する聖体拝受式が盛大に催されるということになった。狂信と若さとオランダでの先例によって胸を熱くした四人の兄弟は、アーヘンの街でも聖像破壊運動という出し物を上演しようと決意を固めた。すでに一度ならず、同じような企てを率いたことがあった副牧師は、前の日の晩、宿屋で酒と料理を前に、教皇政治を呪いながら夜を明かしていた、何人かの、若い、新しい教えに心酔する商人の息子たちや学生たちに声をかけて回り、市の尖塔の上に日が昇り始めると、自分たちの浮かれ仕事に取りかかるための、斧や、あらゆる種類の破壊作業のための道具を手配した。彼らは、聖書の物語が描かれたステンドグラスを壊し始めるための合図をワクワクしながら取り決めた。そして、民衆からは多くの信奉者が出るであろうと確信しながら、鐘が鳴ったその時には、全てを破壊し尽くしてやると心に決めて、大聖堂に向かった。すでに日が出た頃には、尼僧院長は、修道院が危機に瀕しているという報告をある友人から受けていたが、市の統治者である帝国の高官に何度も使いを送っては、修道院の警護のために衛兵をひとり回してほしいと要請していたが、空しかった。彼自身も教皇政治の敵であり、そういう人間として、少なくとも腹の底では新しい教えに共鳴していた帝国の高官は、精霊でも見たんじゃないですか、修道院に危険の影などありませんという世知に長けた口実で、衛兵の派遣を断わるやり方を心得ていた。そうこうするうち、祝典を始める時刻は迫ってきた。不安と祈りの中、尼僧たちはこれからやってくる出来事を惨めな気もちで待ち受けながら、ミサの準備に取りかかっていた。数人の武装した人夫を従えて修道院の入り口に立っている、くたびれた七十代の修道院管理人以外、彼女たちを守ろうとする人間もいなかった。ちなみに尼僧修道院では、よく知られたように、あらゆる種類の楽器の演奏に長けた尼僧たちによって、彼女たちの音楽が彼女たちの力で演奏される。それらはしばしば（おそらくこの秘密に満ちた技芸に備わる女性的な性質のために）、男性のオーケストラにはない正確さ、解釈、感性をもって演奏されてきた。ところで、たまたまその時、数日前から、苦悩を倍加させるように、このオーケストラを

いつも指揮していた楽長のシスター・アントーニアが、ひどい神経熱に罹ってしまっていた。以上のことから、すでにしてマントに身を包み、教会の柱の下にいるのが認められた四人の罰当たりの兄弟は別にしても、礼節に適った音楽作品の演奏に当たって、そもそも修道院は大きな困惑の中にあったのである。前日の晩、その曲が本来もっている特別の荘厳さ、華麗さにより、すでにして何度もオーケストラに大きな効果をもたらしてきた、ある無名の楽匠の手になる極めて古いイタリアのミサ曲を演奏するように命じていた尼僧院長は、いつになく自らの意思に固執すると、シスター・アントーニアの容体がどうなったかを知るため、もう一度、人を送っていた。しかし、用件を言いつかった尼僧は、「シスターは人事不省の状態で横になっており、目論まれている音楽の指揮など、到底、考えられません。」という報告をもち帰ってきた。そうするうち、あらゆる階層、年齢層からなる道を踏み誤った百人以上の悪党たちが、手斧やバールを手に徐々に集まりつつあった大聖堂では、すでにしてゆゆしき騒動が出来していた。正面入口に立つ何人かの人夫たちは、無礼極まりないやり方でからかわれて、時折、何人かが広場で敬虔な勤行に励んでいるのが認められた尼僧たちには、厚かましくも、恥知らずな言葉が浴びせられた。そういうことで、修道院管理人は聖具室に駆け込んで、尼僧院長の前に跪くと、「すぐにも祝典を中止して、市の司令官の保護の下に入るべきです。」と、請願したが、尼僧院長は、「至高の神を賛美するために準備されたこの祝典は始められなければなりません。」と、断固として主張した。彼女は、大聖堂で行なわれるミサや厳かな行列を全力で守り通すべき義務を、修道院管理人に思い起こさせた。それから、ちょうど鐘も鳴ったので、震えおののきながら、彼女を取り囲んでいる尼僧たちに、「とにかく価値があろうとなかろうと、何かオラトリオを選んで、すぐに演奏の準備に取りかかりなさい。」と、命じたのであった。

パイプオルガンのバルコニー席にいた尼僧たちが、これまで何度か披露されたことがあったある音楽作品の総譜を配り、ヴァイオリン、オーボエ、コントラバスの試奏や、調音を始めようとしていた、ちょうどその時であった。突然、シスター・アントーニアが、顔色は少し青ざめていたが、はつらつとした、健康そうな様子で、階段のところからサッと姿を現わした。尼僧院長があれほど強く固執していた、あの極めて古いイタリアのミサ曲の総譜を小脇に抱えていた。「どこから出ていらしたの？　どうして、急によくおなりになったの？」という尼僧たちの驚きの質問には、「とにかく、みなさん、とにかく！」としか答えず、もっていた総譜を配ると、興奮で顔を赤らめながら、この素晴らしい音楽作品の指揮を執るため、パイプオルガンの席に着座したのであった。そういうことで、敬虔な尼僧たちの胸には、ほとんど奇跡のような、天国にいるかのような慰めに似たものが湧き上がってきた。彼女たちは、楽器を手に、すぐに譜面台のところに腰を降ろした。そこにまた、彼女たちが感じていた張り裂けるような思いが交じりあって、彼女たちの魂は、美しい調べだけが支配する神の国へと翼が生えたように誘われた。そのオラトリオは、極めて高度な、驚くべき音楽的な壮麗さをもって演奏された。演奏中、広間や客席ではしわぶきひとつ上がらなかった。とりわけ、サルヴェ・レジーナ、中でもグローリア・イン・エクシェルシスでは、教会の全ての会衆が死んだようになった。呪われた四人の兄弟とその取り巻きたちに逆らうように、床の上の塵すら、舞い上がるのを止めてしまった。ちなみにこの修道院は、三十年戦争の終わり、ヴェストファリア

条約の条項によって世俗化されるまで存続したのである。

この事件がすっかり忘れ去られたそれから六年後、四人の若者の母親がハーグからやってきて、アーヘンの市参事会に全員が失踪したという悲しい申し立てを行なって、彼らがそこから辿った足取りについて、司法上の調査を行なうことを試みた。彼女の話によれば、もともと彼らの家があったオランダで得られた最後の通信は、事件のあった日の直前、つまり聖体拝受式の前日の晩、副牧師から友人のアントワープの学校教師に宛てられた一通の手紙であるとのことであった。副牧師は、手紙の中で、明るいというよりは羽目を外した調子で、聖セシーリエ修道院に対する目論見について、ちなみに母親はそれについては多くを語ろうとしなかったが、便せん四枚に渡ってビッシリと、とりあえずの報告を行なっていた。この悲しみの婦人が探す人物を突き止めようという多くの空しい努力の末、ついにある人が、この申し立てとほぼ一致している、祖国も素性も分からない四人の若者が、もう何年も前から、先頃、皇帝の配慮で建設された市の精神病院にいるという話を思い起こした。しかし、この四人は、宗教的な理念の過剰という病気に侵されており、裁判所がぼんやりと聞いているところでは、その振る舞いは、極めて陰鬱かつメランコリックだというのであった。残念ながらそれは、この母親がよく知る息子たちの性格とは余りにもかけ離れており、彼らがカトリック教徒のようだと聞いたのもあり、彼女はこの知らせをほとんど受け入れられなかった。書かれた色々な特徴に当てはまるところは、ほぼほぼなかったが、彼女は、ある日、裁判所の役人を引き連れて、その精神病院に赴くと、「ここでお世話になっている、不幸な、気の狂った四人と、試しに会わせてもらえませんか。」と、責任者たちに願い出たのであった。しかし、扉の中に踏み込んで、そこに息子たちを見つけた時のあわれな母親の驚きを、一体、誰に記せよう？　彼らは、長い、黒の僧服に身を包んで、十字架が置かれた食卓を取り囲んで、座っていた。両手を組みあわせて、押し黙りながら、食卓の上に身体を投げて、さながら十字架を賛美しているようであった。婦人は、「彼らは、ここで何をしているのです？」と、聞いたが、そこで力が抜けて、ヘナヘナと椅子に座り込んでしまった。これに対して、責任者たちが答えた。「ただただ、キリストを称賛しているのです。申し立てによれば、キリストこそが唯一の神の本当の息子ということを、ほかの誰より洞察したと信じているということです。」責任者たちは続けた。「もうかれこれ六年もの間、若者たちはこの幽霊じみた暮らしを続けています。ほとんど眠らず、食べず、言葉も口にしません。ただ、真夜中に一度、椅子から立ち上がると、その後、屋敷の窓が破れるような大声で、グローリア・イン・エクシェルシスを歌い出すのです。」責任者たちは、確信をもってこう結論した。「といっても、肉体的には健康そのものです。それどころか、やけに真面目で儀式ばってはいますが、ある種の陽気さがあるのも否定できません。狂人だと宣告された時も気の毒そうに肩をすくめていましたし、何度かはこんなことを言っていました。『善良なアーヘンの市民がわれわれが誰かを知ったら、一旦は仕事を置いて、グローリアを歌うため、十字架の周りに腰を降ろすでしょう。』」

この不幸な若者たちの身の毛もよだつ光景に耐えられず、それからすぐ膝をガクガクさせながら、再び自宅に戻った婦人は、この途轍もない出来事のきっかけについての情報を得るため、翌朝、市の有名な織物商人ファイト・ゴットヘルフ氏の門を叩いた。なぜなら、副牧師が書いた手紙の中にこの男の名前があり、そこから、聖体拝受式の日、聖

セシーリエ修道院を破壊する企図に熱心に関わっていたことが、読み取られたのである。この六年の間に結婚をして、数人の子どもをもうけて、父親から相当な規模の商店を引き継いでいた織物商人ファイト・ゴットヘルフは、この見知らぬ婦人を愛想よく出迎えた。どのような気懸かりが自分に女を引き寄せたのかを知ると、扉に閂を差して、椅子を勧めた後で、次のように彼は言った。「奥さま！　六年前、あなたの息子さんたちと仰る通りの関係にあったこのわたしを、どんな審問にも巻き込まぬと仰っていただけるなら、ありのままを腹蔵なくお話ししましょう。そう、われわれは手紙にあった通りの意図をもっていました！　それを実行するため、全てが極めて綿密に、神をも恐れぬ洞察力で計画されていた行動がなぜ頓挫したのか、わたしにはさっぱり分かりません。神自らが、あの敬虔な乙女らの修道院を守られたかのようでした。なぜなら、分かっていただけますか、息子さんたちは、決定的な場面に誘導しようという、神への勤行を妨害するための幾つかの思い上がった悪ふざけに、すでに手をつけていたのですから。当時の、道に迷った市の城壁の中からやってきた、斧や瀝青の塊を手にした三百人以上の悪人は、『大聖堂を土くれに変えてしまえ。』という副牧師から下される合図しか、待ってはおりませんでした。ところが、音楽が始まると同時に、突然、息子さんたちは同じ動きを取ると、オヤッと思うような仕草で帽子を脱ぎました。四人は、徐々に、より深い、言葉にできない感動にとらえられたように、下を向いた顔を両手で覆っていましたが、びっくりするような間を取った後、副牧師がクルリと後ろを振り向いて、ゾッとするような大声で、『すぐに帽子を取りなさい！』と、われわれ全員に言いました。浮わついた調子で、何人かの仲間が横腹を肘で突きながら、聖像破壊のために取り決めた合図を早く出して下さいと、ヒソヒソ促していましたが、無駄でした。答えるかわりに、副牧師は胸のところで両手を十字に交わらせて跪くと、他の兄弟たちと一緒に床の土埃に額を熱心に擦りつけながら、ちょっと前まで嘲りの対象でしかなかった一連の祈祷文をブツブツと唱え始めました。この光景に心の底から揺すぶられたあわれな狂信者たちの群れは、バルコニー席から響き渡るその不思議なオラトリオが終わるまで、指導者を奪われて、なすすべもなく立っていました。そこに司令官の命令で沢山の逮捕状が出されて、すでに狼藉を働いていた何人かの悪人たちは衛兵たちに捕まって連行されたので、あわれな大勢の人々には、押しあい、そこから出ようとする群集に混じってなるべく早く、教会の外に逃げるくらいしかありませんでした。その日の夕べ、戻ってこない息子さんたちを探すため、何度も宿屋に足を運びましたが、それも空しく、帝国の衛兵に親しげに手を貸していた門番なら消息を聞き出せるかもしれないと、友人たちと共、ビクビクしながら、修道院に向かいました。しかし、どう伝えればよいのでしょう。奥さま、あの四人が、相も変わらず、両手を交わらせて、胸と頭をつけて床にキスをしながら、固まって石になったように、熱情を迸らせて、教会のバルコニー席の前で、身体を伸ばして、うつ伏せになっているのを見た時の、わたしの驚きを！　その時、そこにやってきていた修道院管理人は、マントの裾を掴み、哀れな四人を揺すぶりながら、すでに真っ暗で、他には誰の姿も見えない大聖堂から外に出てくれと頼んでいましたが、無駄でした。夢見るような上の空の様子で、人夫たちに腕を取られて入り口に送り出されるまで、彼らがその話に耳を傾けることはありませんでした。そこまで連れ出されて初めて、ため息をつきながら、太陽の光に照らされて背後で華やかに輝いていた教会を悲痛な面もちで何度

も振り返りながら、とうとう彼らは、われわれの後ろについて市の方に歩き出しました。帰り道、わたしと友人たちは、思いやり深く、心を込めて、『一体、内面の奥底にある心情を引っくり返すような、どんな恐ろしいことが起こったのですか。』と、何度も彼らに聞いてみました。彼らは、愛想のよい感じでこっちを見て、われわれの手を取ると、思いに耽るように下を向いて、――ああ！　時々、今でもわたしの心を引き裂く、あの表情を浮かべながら、涙を拭ったのでした。彼らは住まいに戻ると、工夫を凝らして、白樺の小枝を愛らしく結びあわせた十字架を作り、部屋の真ん中の大きな食卓の上の、下女がもってきた二つの明かりの間の、蝋を小さく盛った山の上に立てました。友人たちは、ますます群れの数を増やしながら、脇の方で揉み手をして立っていましたが、徐々に集団がまばらになると、苦しみの余り言葉をなくしながら、その静かで幽霊じみた行ないを眺めていました。その間も、息子さんたちはこれからすること以外の一切の現象に心を閉ざしたかのように、食卓を囲んで腰を降ろすと、静かに両手を組んで、礼拝のための準備を始めました。仲間をもてなすため、その日の朝、言われていた指示に従って、下女が運び入れておいた食事にも手はつけず、その後、夜も更けて、彼らにも疲れが見えているからと隣の部屋に積んでおいた夜具にも手を伸ばしませんでした。友人たちは、このような振る舞いを訝しんでいる宿の主人の怒りを買わぬよう、彼らの脇にあったご馳走が並んだ食事の席に座ると、ほろ苦い、涙の塩で味つけをしながら、大勢の仲間のために用意された夕食を平らげることになりました。と、突然、真夜中が時を打ちました。一瞬、四人の息子さんたちは、鈍い音で鳴っているその鐘に耳を澄ましていましたが、突然、全く同じ動きで椅子からスッと立ちました。こういう前例のない怪しげな始まりから、一体、何が起こるのかと、テーブルクロスを片づけさせながら、不安な面もちで眺めていますと、四人は途轍もなく気味の悪い声で、グローリア・イン・エクシェルシスを歌い出しました。凍てつく冬の季節に、ヒョウやオオカミが天に向かって吠えでもすれば、ああいう風に聞こえるかもしれません。はっきり言って、屋敷の柱はビリビリと震えましたし、窓は見て分かるほどの呼気に当てられて、両手一杯の重たい砂を投げつけられたように、ガタガタと音を立てて今にも砕け散りそうでした。われわれはこのゾッとするような騒ぎに髪の毛を逆立てさせながら、次々に卒倒していきました。それから、マントや帽子もそっちのけで、近くの通りを抜けて、蜘蛛の子を散らすように逃げ出しましたが、しばらくすると通りは、われわれではなく、驚きの余り目を覚まさせられた百人以上の人間で、埋め尽くされたのでした。民衆たちは、屋敷の扉を打ち破ると、このおぞましくもイライラさせられる、永遠に呪われた罪人の口から出てきたような、苦しみに悶えつつ、灼熱地獄の奈落の底から神の耳という恩寵に向かって湧き上がる呻き声の主を探し出そうと、階段を駆け上がって、広間に向かって突進していました。一方の四人は、主人の恨み節や、彼らを取り囲む民衆たちの叫びには全く耳を貸さず、一時の鐘の音と同時にようやく口をつぐむと、顎や胸に滴り落ちる額の汗をハンカチで拭いながら、マントを広げて、少しの間だけ、こういう苦行からくる疲れを取ろうと、床の羽目板の上に身を横たわらせました。四人がまどろみ始めたと見るやいなや、彼らのやりたいようにやらせていた主人も、サッと十字を切って、ちょっとの間でも苦しみから逃れられたのを喜びながら、朝になれば、何か有益な変化が現われるだろうと固く信じて、その場に居あわせて、互いに囁きあっていた人々の群れには、『部屋から出

ていってくれ。』と、頼んでいました。しかし、残念ながら！　一番鶏が時を告げるやいなや、この不幸な人々は、ちょっとの間、疲労だけが中断を強いることができた、あの変わりばえのしない、退屈で幽霊じみた修道院的な暮らしを再開するため、食卓の上に置かれた十字架に向かって、再びムクリと起き上がったのでした。この苦しみに満ちた光景にすっかり心を痛めた主人からのいかなる忠告や手助けも、彼らは受けつけませんでした。彼らは、そうでなければ、毎日、規則的に集まってくるあの友人たちは丁重に追い返してくれるようにと、主人に頼みました。水とパン、もしあれば、寝るための麦わら、四人はそれ以外、何も求めませんでした。こうなるまでに四人の気前のよさからすでに大金をせしめていたこの男は、そういうことで、起こったことの全てを裁判所に訴えて、悪霊が憑依したに違いないこの四人を屋敷から連れ出してくれるようにと、願い出る必要に迫られました。かくして、四人は、市参事会の命令で医学的な診察を受けることになり、ご存知のように、狂人であるという診断が下されて、この種の不幸な人々のために先帝の慈悲で市の城壁の内側に建てられた、あの精神病院の一室に収容されることになったのです。」起こった出来事のおおまかな内的な繋がりを知るためには、十分なことを書いたと思うので、これ以上は差し控えるが、このようなこと、もっと沢山のことを、織物商人ファイト・ゴットヘルフは語った。そして、事件についての司法上の調査が始まっても、決して自分を巻き込まないで欲しいと、再度、婦人には念を押した。

それから三日後、心の底から深くこの知らせに動揺したこの婦人は、女友達の腕にすがりながらの散歩の途中、晴天にも助けられて、見えない雷電によるかのように、神が息子たちを滅亡させた驚くべき現場を見たいという悲しい心づもりで、その修道院に向かった。二人の婦人の前に大聖堂が現われた。しかし、ちょうど建て替えの最中で、入り口は板塀で塞がれていた。無理をして背伸びをしても、板の隙間からは、教会の背面で華やかに煌めく薔薇窓しかのぞき見ることはできなかった。幾重にも組まれた華奢な足場の上、楽しげに歌いながら、何百人もの労働者が、塔をもう三分の一だけ高くして、それまでスレートで覆われていた屋根と尖塔を、陽光を受けてキラキラ輝くしなやかで光沢を帯びた銅の板に、葺き替え直す作業に取りかかっていた。その時、金色に縁取りされたどす黒い雲が、建物の裏手に立ち上がった。それは、早速、アーヘン一帯の上空で雷鳴を轟かせていたが、大聖堂の方角に弱い電光を投げつけた後、何やら不満げにブツブツと呟きながら、霧になって東の地平線に沈んでいった。二人が、様々な物思いに沈みながら、広々とした修道院の居住区の階段から、この二つの光景を眺めていると、正面入り口に佇むこの二人の婦人の素性を、たまたま通りかかった修道女が知ることになった。そんなことで、この婦人があの聖体拝受式についての手紙をもっていると聞いた尼僧院長は、すぐに修道女を呼んで、「そのオランダ婦人にこちらに上がってもらうように話をしなさい。」と、そう言った。少し驚いたものの、このオランダ女は、この示された命令に恭しく従った。このようにして、修道女の案内で、女友達が入り口のすぐ横の控えの間に消えていくと、階段を登らねばならないもうひとりの客に、洗練された美しいバルコニーに繋がるその観音開きの扉は開かれた。そこにあの尼僧院長はいた。それは王のような佇まいの高貴で物静かな女性であった。彼女は、安楽椅子に腰を降ろして、竜の鉤爪で支えられたスツールに足を載せていた。彼女の方に向けて置かれた譜面台の上には、何かの音楽作品の総譜が載せられていた。尼僧院長は、客に椅子を勧めると、「あな

たがこの市にいらっしゃることは、すでに市長から聞いていました。」と、そう打ち明けた。それから、「あわれな息子さんたちの容体はどうですか。」と、思いやり深く聞いた後で、「とにかく、起きてしまったことは変えられませんから、あなた方を襲った運命について、なるべくお話しいただけませんか。」と、促したのであった。あわせて、「副牧師がアントワープの学校教師の友人に宛てて書いたという手紙も見せてもらえませんか。」という希望も伝えられた。このような一手がどういう結論から来ているのかを見抜く経験を積んでいた婦人は、この一言により、たちまち困惑に陥ってしまった。しかし、この婦人の威厳に満ちた顔は、無条件の信頼を求めていたし、手紙の内容を公けにする意図があると考えるのは、礼節にかなっているともいえなかった。それゆえ、少しの熟考の後、懐から例の手紙を取り出すと、手に熱いキスをしながら、王侯のようなその婦人に差し出したのであった。尼僧院長がその手紙にザッと目を通している間に、譜面台の上に無造作に広げられたあの総譜の辺りに、とうとう彼女の視線が落ちた。織物商人の報告で、あの恐怖の日、あわれな息子たちの精神を破壊し、混乱に陥れたのは音楽の力だったのではという考えがあった婦人は、振り向きながら、椅子の後ろで控えていた修道女に対して、「もしやこの作品は、六年前のあの不思議な聖体拝受式があった日の朝、この大聖堂で演奏されたものではありませんか？」と、小さな声で聞いた。若い尼僧からの、「ええ！　あれを聞いた時のことは今でも覚えています。それ以来、必要がない時は、尊師の部屋に置くことになっているのです。」という答えに、婦人は、ひどくうろたえた様子で腰を浮かせると、様々な思いが交錯する中、その譜面台の前でパタリと歩みを止めた。彼女は、恐ろしい精霊たちが密かに自らの魔圏を打ち建てているような、魔術的で意味の分からぬ記号たちを眺めながら、まさにグローリア・イン・エクシェルシスの箇所が開いているのに気がついて、床面に吸い込まれるような感じがした。息子たちを破滅させた音楽がもつ恐怖の全体が、半狂乱の状態で頭上に押し寄せたかのようであった。見ているだけで気が遠くなると思いながら、神々しいばかりの全能に対して湧き上がる恭順と献身の思いに駆られて、そのページに素早く唇を押し当てると、彼女は元の椅子に戻った。尼僧院長はその間に手紙にザッと目を通していたが、それを折り畳みながら、言った。「驚くべきことがあったあの日、神自らが、ひどく混乱した息子さんたちの高慢さから、この修道院を守って下さいました。その際、どんな手段が用いられたのか、プロテスタントのあなたにはどちらでもよいことでしょう。このことについてお話しできるにしても、ほとんど理解してもらえるのかどうか。というのも、よろしいですか、聖像破壊運動が襲いかかるという恐怖の時間が迫っていたあの瞬間、そこに開かれている作品を誰がパイプオルガン席で平然と指揮したのか、全く分かっていないのです。作品を指揮できた唯一の人物であるシスター・アントーニアが、演奏の間中、病気のため、人事不省の状態で、本当に手足をダラリと伸ばして修道院の一室の片隅で横になっていたことは、翌朝、修道院管理人や他の多くの人々の立ち会いの下で採録されて、保管庫に納められている証言で裏づけられています。大聖堂で聖体拝受式が祝われたあの日の午前中、血を分けた縁者として身の周りの世話のためにつき添っていた修道女も、その枕元を離れてはいませんでした。そう、あのシスター・アントーニアさえいれば、間違いなく、あのように奇妙かつ異様な形でバルコニーのオルガン席に姿を現わした人物が自分であるはずがないという事情を、自らの口で明らかにして、説明してく

れたのでしょうが。それもこれも、あくまで彼女の人事不省の健康状態がそのことについて質問できる程度のものであり、その日の夕方、そのために寝込んでいた神経熱（その時まで、生命に関わるとは全く思えませんでしたが）で、まだこの患者が亡くなっていなかったらという話なのです。この事件についての報告を受けたトリーアの大司教も、彼だけに打ち明けられた話として、『この驚くべき、同時に、素晴らしい奇跡をなし遂げられたのは、聖セシーリエご自身である。』と、仰っています。たった今、法王様から届いた小勅書も、そのことを裏づけています。」そして、既知の事実にさらに詳しい情報をつけ加えるために、何にも使わないという約束でようやく見せてもらった手紙を、彼女に返却した。それから、「息子さんたちには回復の見込みがありますか。」とか、「よければそのために何かお金やそれ以外の援助を用立てましょうか。」と、もう一度、尼僧院長は聞いたが、婦人は、スカートにキスをして、涙ながらにこの申し出を辞退した後で、心を込めて握手をして、その場を後にした。

ここにこの伝説は終わる。アーヘンでの滞在で、何の収穫も得られなかった婦人は、かわいそうな息子たちのために裁判所に預けた少額の資産を残して、ハーグに帰り、そこで一年後、この事件に深く心を動かされて、カトリック教会の懐の中に戻った。そして、息子たちは、晩年、いつもの習慣で、最後にもう一度、グローリア・イン・エクシェルシスを歌うと、明るく楽しく死んでいった。

聖セシーリエあるいは音楽の力　ある伝説　ハインリヒ・フォン・クライスト

翻　訳　　bambus

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社